

A narrow residential street in Japan, lined with multi-story houses. Several people are walking away from the camera down the street. Utility poles with many wires are visible overhead. The sky is overcast. The overall atmosphere is quiet and everyday.

この町で

いきる

Atelier CORNERS

コーナス ろじなか 路地中 ぎんじょ 近所マップ

共立通・丸山通周辺マップ

近所さんには、
ちゃんとあいさつ
するんやで。



**生活介護
アトリエコーナス**
隣近所で声をかけ合える関係にこたわり、白岩高子代表がお手紙攻撃で所有者を口説き落として入手した築84年の町屋。来客時はメンバーがコーヒーとクッキーでおもてなし。地域住民の集まりの場として提供することも。

**共同生活援助・
グループホーム
ベイトコーナス**
白岩高子代表が1990年にスウェーデンのグループホームを視察して以来、長年の夢であった“完全個室”のグループホームをここに実現。

**カフェ & レンタルスペース
KIKUYA GARDEN
居宅介護・重度訪問介護
サポートネットコーナス**
スリランカ料理を提供するカフェ「スリランカの風」はArtLab-Nextの就労先の一つ。コーナスメンバーの作品を眺めながら、アーユルヴェーダランチに舌鼓。レンタルスペースは、キッチン・カフェ、多目的ホール、エステルーム、シアタールーム、コワーキングスペースと使い方がいろいろ。

おっちゃん
みんなにいつもあいさつをしてくれる。深い話をしてくれる。区役所でクッキー販売をしたときには、無言でどっさり購入してくれた。すごく応援してくれている。

旧インクルーシブカフェ
インクルーシブカフェがあった場所。家主から「ここで何かしませんか?」と声をかけられたのをきっかけに、地域の子育て世代が子連れでも気軽な集まれる場所を開設。イベントなども行った。KIKUYA GARDENの前身とも言えるレンタルスペース。

**タマリバ [美容部]
よりみち [青果部] (1F)
タマリバ [レンタルスペース部]
よりみち [喫茶部] (2F)**
美容室&レンタルスペースのタマリバと、青果店&カフェのよりみち。ArtLab-Nextの就労先の一つ、コーナスのクッキーも販売。オーナーは美容師で、白岩高子代表やアルガマ明子施設長をはじめコーナススタッフや地域の人々の行きつけの美容室でもある。コーナスメンバーの成人式には着付けなどもしてくれる。共立通をもちあげる熱き仲間。

**児童発達支援
放課後等デイサービス
えがおの玉手箱**
共立通の様子を見て、「この町でなら」と2022年に開設された施設。コーナスがこの町で取り組んできたことが、新しい世代にもつながっていく。

**自立訓練 Art-Labox (1F)
就労継続支援 B型 ArtLab-Next (2F)**
家主から「地域活性化のために、ここで何かして!」と頼まれ、自立訓練Art-Laboxをここに移転。2階にはArtLab-Nextも。向かいには、外部就労先のタマリバ/よりみち。

マナ乳児保育園
阿倍野で共に生きよう会が拠点としていた場所。また、コーナス共生作業所もここで生まれた。職員の実験室だった3階の部屋を、望之門保育園の樋口専務理事が拠点として貸してくれた。

**旧サポートネットコーナス (2F)
ギャラリー (1F)**
サポートネットコーナスがあった場所 (現在はKIKUYA GARDENに移転)。コーナスメンバーの日々の活動が地域の人々からも見えるように、1階をギャラリーとした。メンバーがこの町で生きていることを人々に伝える役割を担った。

望之門保育園
はじまりの地。阿倍野で共に生きよう会が生まれた場所であり、ここが地獄の(バザーの)一丁目。現在もコーナス通信を配布している。コロナ禍前は月1回、クッキーの販売も行った。「コーナス通信のコーナスさんですよ?」と地域の人に知ってもらうきっかけにもなる場所。

**日本キリスト教団
阿倍野教会**
コーナスの活動を陰ながら支えてきた教会。2021年9月には創立100周年を迎えた。敷地内に望之門保育園がある。

富吉医院
長いお付き合いの嘔吐医。月1回健診に来てくれる。

大阪キリスト教短期大学
この地で100年以上の歴史をもつ。ボランティアなどで地域と深くつながっている。白岩高子代表とは長いお付き合いの池田美芽先生(コーナスクッキー大ファン)もゼミの生徒さんを連れコーナスに交流に訪れる。

旧コーナス共生作業所
コーナス共生作業所があった場所。メンバーと親たちの激闘(内職とか)の跡。せまい文化住宅の一室にたくさんの笑いが詰まっている。



新聞配達のおばちゃん
いつも新聞をありがとう。

近所さん
コーナスの後援会員など、応援してくれる近所さんと路地ではったり。世間話に華が咲く。

天下茶屋会館

大谷中学校・高等学校

郵便ポスト
災害時避難所が大谷中学校・高等学校で、避難訓練の際はここが点呼場所になっている。

西坂書店

大阪キリスト教短期大学

大阪市立丸山小学校

阿倍野警察署

100m

至天王寺駅前



広域マップ



**あべのベルタ
わのわCAFÉ (B1F)
市民学習センター (3F)**
わのわCAFÉ (B1F)のオーナーは、コーナスのアルガマ明子施設長と友だち。オーナーがコーナスにふらっと遊びに来たときに、大川誠さんの「Makoot」を気に入り、1年間のレンタルを希望、後に購入した。最近まで店内で守り神のように飾られていた。市民学習センター (3F)には、コーナス通信の印刷のために輪転機を回した記憶が揺蕩う。

旧ベイトコーナス
ベイトコーナスがあった場所 (現在は共立通に移転)。「ベイト」は聖書の言葉で「家」。望之門保育園園長の村山牧師に名付けてもらう。アトリエコーナスからは約2kmの距離で、行きは送迎車、帰りは体力づくりも兼ねて歩くこともあった。

至浜寺駅前

アトリエコーナスのあゆみ

Atelier CORNERS HISTORY

西暦	月	出来事
1976		白岩高子、娘・直子を生む
1980		白岩直子、望之門 ^{のぞみのもん} 保育園(阿倍野区阿倍野筋)に入園する ep.1 「共生」のすがた
1981		大阪・長居公園にてノーマライゼーション国際大会の報告会が開催される ep.2 ノーマライゼーションの衝撃
	7	「阿倍野で共に生きよう会」発表 ep.3 生きる場を求めて 地獄のバザーがはじまる ep.4 地獄のバザー
1989	3	「コーナス共生作業所」誕生 ep.5 CORNERSTONE 隅 ^{かすいし} の頭石
	4	コーナス通信第0号が発行される ep.6 コーナス通信
1992	4	大阪市認証の福祉作業所となる
1993	4	阿倍野区丸山通の文化住宅に移転する ep.7 コーナス内職哀歌
2001	3	グループホーム「ベイトコーナス」開設
2004		ノーマライゼーションの理念に基づいた新たなコーナスをつくるため、物件探しをはじめ ep.8 町屋へのこだわり
2005	2	市民債券を発行する ep.9 コーナスとお金の話
	5	「小規模福祉作業センター・コーナス」に名称変更。現在の町屋(阿倍野区共立通)に移転する ep.10 コーナスと共立通 同所に地域交流スペース「NAKA」開設 アート活動を開始する ep.11 コーナスのアート活動
	10	「障害者自立支援法」成立 行政から他の共同作業所と合併し、20人定員の授産施設に移行するよう指導を受ける
2006	2	コーナス初のグループ展「路地裏のさんぽ道・展」開催(会場:大阪/H&H Japan Inc.)
2007	4	NPO法人格を取得。「特定非営利活動法人コーナス 小規模福祉作業センター・コーナス」となる 地域での清掃活動が認められ、大阪市より表彰される 吉川真美、「産経はばたけアート・フェスタ2007」においてデザイン特別賞を受賞する
2008		「インクルーシブカフェ」開設 西岡弘治、「かんでんコロバ・アート21」において最優秀賞を受賞する ep.12 コーナスのお祝い事と行事
2009	1	居宅介護・重度訪問介護「サポートネットコーナス」開設 コーナスメンバーの作品が海を渡る ep.13 世に出したい一心で
2010	6	笠谷圭見氏がコーナスを訪問。プロジェクトPR-yとコラボレーションする
2011	3	地域交流スペース「NAKA」、「サポートネットコーナス」に移転する
	4	生活介護に移行。「アトリエコーナス」に名称変更 「第19回LELA国際芸術祭(アメリカ・ロサンゼルス)」に日本のグループの一つとして出展する
2016	4	多機能型施設に移行。生活介護アトリエコーナスに加え自立訓練「Art-Labox」を開設
2017	10	グループホーム「ベイトコーナス」、新居に移転する
2018	10	自立訓練「Art-Labox」、近隣に移転する
2020	4	就労継続支援B型「ArtLab-Next」開設
2021	12	カフェ&レンタルスペース「KIKUYA GARDEN」開設

エピソード episode

いろんなこと
あったんよ

ep.0 あの日の風景

後にコーナスの代表となる白岩高子は、絵を描くのが好きな女の子だった。幼稚園のころまでは、「たかちゃん絵が上手」とほめられて育った。しかし、小学校の先生に「既成的な絵を描く」とだめな絵の烙印を押され、描けなくなってしまう。そんなとき、親にすすめられて通うようになったのが、近所の寺で開かれていた絵画塾である。入塾してもしばらくは描けなかったが、塾の先生は高子に何も言わなかった。廊下で描いたり、灯籠に腰かけて描いたり、描かなかったり、とにかく自由にすごしている子どもたちの様子を眺めていた。一か月ぐらい経ったころ、チューブから出したての白の絵の具で雲の絵を描いたとき、先生がずっと高子のそばに来て、「ええ雲やなあ」とその絵をほめた。白岩代表にとって忘れられないこの思い出が、コーナスのアートの原風景でもある。



ep.1 「共生」のすがた

白岩高子代表の娘、直子は難治性てんかんを持って生まれた。大阪中の病院を巡ってもてんかんを抑えることはできず、起き出しては倒れを繰り返す日々が続いた。それでも直子は遊ぶ相手を求めて外に行きたがる子どもだった。そんな直子を通うようになったのは、望之門(のぞみのもん)保育園である。障がい児共生保育を行う保育園が、幸運にも地域にあった。はじめて見た運動会のことを白岩代表は忘れられない。走れない子をみんなで支えながら走るなど、一人ひとりを尊重した運動会だった。「共生ってこういうことなんだな」と心うたれた。



ep.2 ノーマライゼーションの衝撃

国際連合が国際障害者年に指定した1981年、白岩高子代表は知人に誘われて、大阪・長居公園で開催されたノーマライゼーション国際大会の報告会に参加する。そこで知ったノーマライゼーションの理念に衝撃を受ける。障がいのある人もない人も分け隔てなく、共に生きる社会をめざす考え方は、宇宙に行くほどに隔てのあるものであった。娘の将来に幻想も抱けないような現実、こう考えるようになる。「ノーマライゼーションの社会になるのを待つのではなく、自分からつくる人になろう」。



ep.3 生きる場を求めて

阿倍野で共に生きよう会は、望之門保育園の職員と重い障がいのある子を持つ母親たちが中心となって、我が子の生きる場・働く場づくりをめざし活動を開始した。保育園の後押しは大きく、併設されたマナ乳児保育園の3階を借りて拠点とした。当時は福祉制度も充実していなかったため、バザーを開催するなどして資金を集め運営を続けたが、親たちへの負担も大きく、発表当初25人いた親の会の会員も最後は7人となった。これが後にコーナスの核となる。コーナスの歴史は、親たちの戦いの歴史でもある。

よしっ

ep.4 地獄のバザー

阿倍野で共に生きよう会が主催したバザーは、縁日と言うべき大規模なものであり、多いときで70万円の売り上げを記録したという。焼きそば、おでん、かやくご飯、ちらし寿司、お餅、たこせんべい、ヨーヨー釣り、供出品の販売、そしてtotoコーナス(宝くじ)。バザーの運営を担ったのも親の会の母親たちである。集まった供出品を保育園の3階に何度も何度も運び上げ、開催日が近づけば夜遅くまで準備に追われる。「やりたくない」と言う親と時にけんかし、「我が子のため」となだめることもあった。つらい側面もある一方で、世代の違う母親たちがバザーの準備を通して日常の悩みを相談し合うなど、親たちをつなぐ側面もあった。負担の大きさや供出品が集まりにくくなったことからその歴史に幕を閉じたが、地獄と呼ばれたバザーもコーナスの今を支えている。



バザーの会場は望之門保育園

バザーのお知らせとお願い

1994年10月13日(木)
コーナス共生作業所

障害者がくらしやすい地域は誰もがくらしやすい地域です

をテーマに恒例のバザーを開催します。

※日時 11月3日(祝)文化の日A. M11:00~P. M2:00

※場所 望之門保育園 阿倍野教会

※主催 コーナス共生作業所 日本キリスト教団阿倍野教会

※協賛 望之門保育園 マナ乳児保育園 ナルド夜間保育園 望之門学童保育所

日頃は多くのご協力をありがとうございます。コーナスの名称は聖書の中のコーナーストーン(Corner Stone) 隅の頭石から由来しており、阿倍野教会の村山牧師によって名付けられました。能力主義が優先される現代社会の中では生産力を持たない彼らは、常に弱い立場におかれます。時には人として生きていくための当たり前のことも認められず……。しかし彼らが今の社会を支える隅の頭石であり、障害者が普通に生きていく街づくりが誰もが暮らしやすい社会を創っていく事でもあると思うのです。

毎年のバザーを通して、地域の方々に私共の存在や活動を知って頂ける様になりました。又多くのボランティアや協力者を得ることができ、理解の輪が確実に広がっていることをうれしく思います。ご来場者も乳幼児、学童、お父さん、お母さん、お祖父さん、お祖母さん、地域のお年寄りの方々など年齢を越えたふれあいの場となっています。

コーナス共生作業所一同、今年も皆様にお会いできるのを楽しみにしております。ご家族やお友達をお誘いの上お越しください。お待ちしております。

ぼくたちのバザーが近づいて
きました。11月3日文化の日です。
ご家族おそろいできて下さい。

植野康幸

ぼくはバザーでたくさんお土産
のプレゼントをもらって
かんぱりします。大浪晴久

ぼくもかんぱります。
大川誠哉

ep.5 CORNERSTONE 隅の頭石

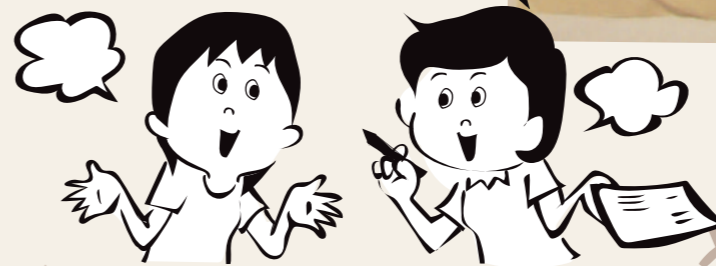
コーナス共生作業所は、1989年3月に自主運営を開始した。当初のメンバー(利用者)は2人。場所は引き続きマナ乳児保育園の3階を使用した。望之門保育園園長の村山牧師がその門出を祝い、聖書にあるCORNERSTONE(隅の頭石)から、「コーナス」と名付けた。大工が不要として捨てた石が、新しい家をつくるときの基礎の石になったという言葉に由来している。「障がい者の存在は、この社会を支える隅の頭石だよ」。村山牧師の言葉もまた、コーナスの礎である。

とってもだいじ

ごくろうさん

ep.6 コーナス通信

コーナスでは、コーナス共生作業所が誕生した1989年からコーナス通信の発行が続けられている。現在は年に4回の発行だが、発刊から2007年4月(第217号)までの長きにわたり月1回の発行が続けられていた。制作の中心となったのは、障がいのある子を持つ親の会。母親たちが当番で編集委員を務め、手書きの原稿やイラストを貼り合わせて制作し、保育園や近隣地域の家庭に配布した。当然のことながら素人の母親たちに原稿の制作は大きな負担となる。少しでもスペースを稼ごうと大きな字を書いて、紙面がスカスカになることもあった。つらいながらも発行を続けた背景には、コーナスを常に陰で支えてくれた当時の望之門保育園の樋口専務理事の教えがある。「将来必ず役に立つから、毎月発行しなさい」。その言葉通り、コーナス通信はメンバーや親たちを支え、コーナスと地域をつなぎ、40年以上にわたるコーナスの歴史を今に伝えている。



コーナス通信第0号



今月のコーナス

紙面のついでに小さなスペースとなりましたがコーナス情報です。作業は以前からの手紙による後継りや、ていぶつ二人ともペースは快調。でも3月3日何か新しい作業を思っています。何かお案がわいたら御教えたさい!

開田村情報(4/10)

不定期連載予定の開田村情報です。まず今回は、開田村とはなんぞや? という事から開田村は長野県 御嶽山と東横の間にあり美しい自然が残る村です。そこから自然水や高山植物、樹木を採取し加工してコーナスの活動資金とさせていただきます。なごごだいた〜んな事も考がえていっているのですが、なごごはコーナスの二人といっしょに「自然を築く」という事で4月18、19日の二日二日でコーナス共生作業所 却外活動第一弾と指導員遠山と樋口先生の4人で行って来ました。何があったか? は又次号で!!

5月予定

5/5 ~ 5/9
・希望の家(仮設施設)実習(週二日連続)
5/26(金)
・星若高原 ハイキング(雨天30日)

やるしかないんや

ep.7 コーナス内職哀歌

阿倍野で共に生きよう会では、バザーのほかに空き缶集めや野菜の販売(マナ乳児保育園3階のテラス部分に菜園をつくり、キュウリやトマトを栽培した)などもしていたが、コーナス共生作業所となり、丸山通に移転してから行っていた内職の代表的なものとしては、傘釘(波板ビス)の組立がある。傘のついたビスにナットを回し入れて一組にする。それが一つで43銭。メンバーたちは、する子もいれない子もいるといった様子で、スタッフと当番で出てきている親たちが納期に追われながら製作した。それでも収入は月に1万5000円。内職が共同作業所どうして取り合いになる時代。薄給でもやるしかないというのは、どこの作業所でも同じであった。



コーナス共生作業所での内職風景(写真はバスマット製作)

ほんまつらかった

あたりまえに生きていくために

ep.8 町屋へのこだわり

丸山通からの移転先を探す際にこだわったのは、家サイズの町屋であること。コーナスは、遠くからたくさん人を集めるような大きな施設を望んでいない。なぜならそこは、サービスとして利用する施設ではなく、メンバーが生まれ育った町であたりまえに生きていくための「家」だからである。

開放的で地域の人々がふらっと入って来られるような場所をつくりたいと考えていたときに、共立通の角地にいい物件が見つかった。不動産屋が建売業者と交渉中であつたところ、白岩高子代表は東京にいた所有者に直接手紙を書いた。「とてもいい家なので一部だけ改修して使用したい」と伝えたとこ、売却を快諾してくれたという。当初のねらい通り、いまではクッキーを焼く匂いにさそわれてふらっと人が入ってきたり、ジョギング中の人々がトイレを借りに入ってくるなど、コンビニのような開放的な場所となっている。



ep.10 コーナスと共立通

障がい者施設が移転してくることに反対だった人もいたであろうが、いまコーナスは町屋に軒を連ねてあたりまえにそこにある。障がい者に対する偏見をとかすのに大きな役割を果たしたのは、地域の清掃活動であろう。丸山通でも行っていた清掃活動を共立通に移転した翌日から黙々と始めたところ、それを見た町会の婦人部長が「なんとすばらしい」と評価したことを皮切りに、周囲の人々の見目が変わっていった。折にふれ「コーナスさんがいつも掃除してくれるから、ここの通りこんなにきれいなやね」と言ってくれる人もいるという。見えないからこそ人は不安を抱く。狭い路地をはさんではっきりとそこに見える距離感がコーナスと地域をつないでいる。



ep.9 コーナスとお金の話

共立通に移転する際の資金には、将来のために貯めていたお金が充てられた。補助金では家賃の支払いがやっとという中で貯蓄ができた背景にも、望之門保育園の樋口専務理事の存在があつた。保育園の清掃作業を業務として発注してくれたり、将来のために貯蓄しておくよう助言してくれたこの人に、白岩高子代表は育てられたと言っても過言ではない。

貯めていたお金に親たちからの出資金、親戚や友人から借りたお金を加え、それでも足りない改築費用を賄うために市民債券を発行した。寄付ではなく債券としたのは、リスクを負った方が必死になれると考えたからである。堅実さと大胆さ、覚悟がそこに表れている。

●お申し込みいただいた後、以下のような債券（借用書）を送らせていただきます。

●返済の目的等については、4月以降に返済計画をたてますので、開票が決定次第開票お知らせいたします。

よろしくおねがいします!!!

コーナス共生作業所
2025年2月25日
〒945-0942 大宮市阿部野区丸山通2-9-16丸山マンション1F
TEL & FAX (06) 6659-0912

コーナス共生作業所より
緊急のお願い

『コーナス共生作業所』から皆様へ緊急のお知らせです。いつもご支援を頂いていますのに、勝手なお断りで恐縮ですが、今後の活動に關する事柄です。どうかお許し下さい。

この度、コーナス共生作業所が移転することになりました。16年前に始めた作業所は、マナ乳児保育の3階をお借りして、メンバー2名からのスタートでした。その後、メンバーがもるになり福祉作業所としての本格的な活動に移行するため、現在の賃貸住宅に移転しました。12年間の家賃とガレージ代は、23,670,000円で土地付きの家賃を支払える様になりました。

●国の障害者就業や予算は、ますます厳しさを増しています。補助金に頼る運営から開放することや、内勤作業中心の活動を見出す時期も来ています。「もともとメンバーの個性や持ち生かせる活動がしたい」「あなたがしたいアミさんやオオさんが、くつろげる空間がほしい」「ボランティアさんや地域の方が来てほしい作業所にしたい」などの理由から、条件を探していました。

それが、見つかりました。共立通2丁目にある築67年の古い町屋です。敷地は28坪あり、室内は十分な採光に広い物置・備置など、ぜひたくさん遊ばせて。奥さんは、「解体せずに、少し手を入れて使いたい」という私たちの意向や活動も理解して下さい。安価で使わせて下さいました。

親の出資金と借立金、親戚友人や設立以来の支援者の方々に助けを借り、手に入れたのです。「コーナスのためやたら貸すよ」の言葉が有り難く、励みにもなりました。しかし、作業所として使うには平直しが必要で、障がい者用のトイレ改修や作業スペースの確保に費用の負担、距離確保も必要です。そこで、お願いです。

私たちに改築費用を貸して下さい。カンパはもっとうれしいです。

ep.11 コーナスのアート活動

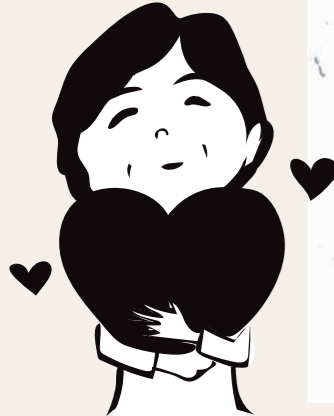
コーナスのアート活動は白岩高子代表の「根拠のない自信」によってはじめた。2005年当時、先駆的にアート活動を行っている施設があることは知っていたものの、実際の現場を見たことはなかった。それでも、たんぼぼの家の山野将志さんの作品を見たときに「コーナスのメンバーにもできるんじゃないか」「自分の世界を頑なに守っている彼らにこそ、オリジナルなものがつくれるんじゃないか」と感じたことがきっかけとなった。最初は創作の経験のあるスタッフとともに、メンバーの隣でいろんな画材を使ってみせることから始めた。瓶に粘土を貼り付けてみせたりするとメンバーも反応を見せ、一年も経たないうちにみんなが創作をはじめた。

コーナスのアート活動に一貫しているのは、「自由に作る」「承認するだけ」という姿勢。何をしろとも言わないし、何を描けとも言わない。描いてもいいし、描かなくてもいい。何をやるにも本人の自由。その背景には、メンバーの意思とは関係なく無理に内職をさせてきたことへの負目のような気持ちもあったという。



アート活動をはじめた当初は反対する親も多かった。「アートなんてやるわけないし、やって何になるのか」「すぐに飽きてしまうのではないかと」いった思いがあつた。しかし、集中することができないと思っていた子どもたちが熱心に創作に打ち込み、抑圧から解き放たれたように自らの表現を開花させていく様子を見て次第に考えが変わっていった。言葉で伝えることの難しいメンバーの心の内がアートを通してわかることもあつた。コーナスのアート活動は、作品をつくるのが目的ではなく、重い障がいのある人によりそい、その人の日中活動をいかに豊かにしていくかという意識が根底にある。そこにはアート以外の知識と経験が必要であり、スタッフへの負担も大きい。メンバーの状態をスタッフ間で報告し合い、こうすればうまくいったというようなことがあれば、ちょっとしたことで共有し合うということを日々続けている。そうした中で作品が生まれること、それが評価されることは、スタッフの励みにもなっている。アート活動を通してメンバーも親もスタッフも共に生きているのである。

おおきに



アートでわかる心の内

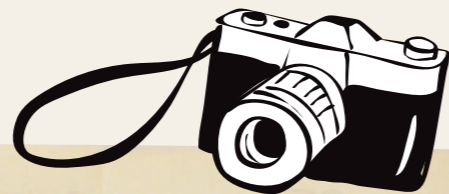
ep.12 コーナスのお祝い事と行事

コーナスでは、お祝い事があればみんなで祝うのが基本である。メンバーが成人を迎えれば、お餅をついてみんなで祝い、隣近所に出向いて「この子が成人になりました」と挨拶してまわる。メンバーが公募展で受賞すれば、表彰式をみんなで見に行き、展覧会があればどんなに遠くても可能な限り親も一緒にみんなで見に行く。海外であっても同様である。それは、メンバーにとって一番輝けるときだからである。親たちは、我が子の作品とともに成長した我が子の姿をそこで目にするようになる。

コーナスには、折々に撮影された写真が大量に残されている。旅行の写真もたくさんある。北海道標茶町3泊4日の旅、沖縄県那覇市2泊3日の旅、鳥取県大山りんご農家の旅。仮装をして笑っている写真がある。おいしそうに食事をしている写真がある。それは、家族写真そのものである。



めでたい



海もわたる



展覧会「共通感覚を拡げて“Spread Our Common Sense” in 香港」に出展のため香港へ

ep.13 世に出したい一心で

メンバーが素晴らしい作品をつくる一方で、それを世に出すにはどうすればいいのかわからなかった。なんとかしたいその一心でさまざまな伝手をたどり、ロサンゼルスに住む日本人アーティストのもとを訪ねた。「白岩さんは、障がい者アートを世に出そうとしているのですか」という問いに「男とか女とか年齢とか障がいのあるなしに関わらず、誰でも可能性があることをこの絵を通して伝えたいだけです」と答えると、そのアーティストはこう答えた。「それがアメリカの流儀なんです。応援しましょう」。この出会いが、コーナスメンバーの作品が海外で評価される先駆けとなった。



香港のアート関係者と名刺交換するコーナスメンバーの吉川真美さん

ep.14 この町で生き、この町で死ぬ

40年もの長きにわたる歴史の中には、当然ながら大切な人との別れもある。中でも松村亜未香さんとの別れは白岩高子代表の心に深く刻まれている。障がいの重い亜未香さんはベッドに寝たきりで、視野は狭く仰ぎ見るその範囲だけしかなかった。成長するたびにベッドはどんどん手狭になり、丸山通の文化住宅からの移転を考えた背景には、亜未香さんがゆっくりできる場所をつくりたいという思いもあった。亜未香さんに青空に映える赤いりんごを見せたくて、大山の見えるりんご農家を旅したこともあった。亜未香さんが亡くなったときは、大切なものが失われることの意味がまったくわからなかったと白岩代表は言う。その後、コーナスメンバーの大川誠さんが亡くなるなど、大切な人との別れを経験していく中で、「この人たちは、コーナスの礎、CORNERSTONEになっていくんだ」という思いを抱くようになったという。



コーナス共生作業所の玄関にて(右から2人目が亜未香さん)

北海道旅行記

フェリーに30時間揺られ、降り立ったのは、緑につつまれゆく北の大地。まぶしい光の中を...と! いきたかたのすがら、初日の朝は曇り、雨も降ってないけど、でもよしとせねば、とゆうわけで、旅のスタート。

は、さらされた車で行くうちに空も晴れ、富良野に着く頃には、なかなかの天気となりました。第1,2,3日と、キャンプ。

では、岬を夕暮れまで散歩。第4日は360度地帯線で見られる中標津(開陽台)にテントを張り、キャンプの訪問を受けるなど、なかなか楽しかった。11月23日もあった。また5日目は知床のウトロと言う所に宿をとって、知床五湖の散策。日本最北の秘境、とあわれ、住民自身がその美しい自然の一部をほんの少し見る事ができました。その後「日本最北端の地帯線を走り、茶臼山を登る」。

また富良野では、ドラム缶の田舎の口角地帯田では、樹齢120年と云われるハルニシの木が、その手原で遊んで霧多布。

二人の様子は9月発行の旅行記に(中略)

わすれない



ep.15 コーナスの40年とこれから

時代の流れとともに、変わりゆくものがある。かつての親の会ほどの強い横の連帯はないものの、親たちはメールやSNSを通して個々にスタッフとつながっている。アート活動に対する社会の見方も変化しつつある。それでもコーナスは変わらずこの町にある。

こんな話がある。高齢で妊娠したある女性が、生まれてくる子に障がいがあるかもしれないと不安に思いつつも、「コーナスさんがあるからいいか」と言ったという。長い歴史の中でコーナスは居場所として地域に根付き、知らないうちに安心を与える場にもなっていたのである。また、こんな話もある。コーナスが丸山通にあったときに近所に住んでいた人が、共立通に移転してから10年以上経ったところにコーナスを訪れて、「お掃除してくれてありがとう」と言ったという。ずっと前から声をかけたかったが、そのときは言えなかったそうだ。

時とともに人の意識は変わっていく。何年も経たないとわからないこともある。さまざまな変化に折り合いをつけながら、コーナスは今日もあたりまえにこの町でいきる。

